二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間 七十分）　その一

《一》 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（字数制限のある問題については、句読点も一字に数える。）

Ⅰ

一九六四年の東京オリンピックの閉会式で、電光A<ruby>ケイジバン<rt></rt></ruby>に「SAYONARA」の文字が浮かび上がり、この言葉は一気に世界中に知られた。「さらば」「さよ(う)なら」は、日本人が昔から使ってきた別れ言葉である。「さらば」「さようなら」とは、もともとは「<ruby>然<rt>さ</rt></ruby>あらば」「さようであるならば」といった接続詞であったものが、別れ言葉になったものである。考えてみれば、こうした、ちょっと不思議な言葉遣いで、日本人は別れてきたのである。こうした日本人の別れ言葉について考えてみよう。

世界の別れ言葉は、およそ、以下の三つのタイプに分けることができる。

① Good-bye(グッドバイ)やAdieu(アデュー)のような、「神の御<ruby>許<rt>もと</rt></ruby>に」と願うもの。
② See you again(シーユーアゲイン)やAuf Wiedersehen(アウフヴィダーゼーエン)のような、「また会おう」と再会を願うもの。
③ Farewell(フェアウェル)やアンニョン(安寧)ヒ　ゲセヨのように、「お元気で」と願うもの。

日本人の場合、①のような別れ言葉はあまり使わないが、②のように、「 1 」とか「 2 」と言って別れるし、③のように、「お元気で」とか「 3 」という別れ言葉はごくふつうに使われている。

しかし何といっても、日本人の別れ言葉としては、「さらば」「さようなら」という、①②③のいずれでもない独特な別れ方がもっとも一般的であったし、現代では、それとまったく同じような発想の「 4 」「 5 」「 6 」「 7 」もB<ruby>ヒンパン<rt></rt></ruby>に使われている。

なぜ日本人は、このように、「さようなら」「 4 」といった言い方で別れてきたのだろうか。その別れ方が、世界では一般的でないとすれば、それは、日本人の、人生や世界のどのような捉え方に基づいているのだろうか。

Ⅱ

「さらば」「さようなら」とは、もともとは、これまでのことを受けて、これからのことが起こることを示す、「<ruby>然<rt>さ</rt></ruby>あらば」「さようであるならば」、という意味の接続詞であった(「……、さらば行かむ」＝「……、さようであるならば、行こう」)が、それがやがて、別れ言葉として自立して使われるようになったものである。

そこには、別れに際して、「さようであるならば」と、いったん立ちどまり、何かを確認することで、次のことに進んで行こうとする(ということは、逆に、そうした確認がないと次に進んで行きにくい)という、日本人の独特な発想がひそんでいるのではないかといわれている。

たとえば、日本の小、中学校などでする、起立・礼・着席といったあいさつ・Cギシキや、電車の発車時の出発・進行といったDシャショウのかけ声、さらには、祭りの「ヤア」「ドッコイショ」「チョイト」といった囃<ruby>はや<rt></rt></ruby>し声など、ことの移り行きをあえて言葉にして確認しながら進めるやり方は、われわれにはまったく見慣れた光景であるが、外国人からすればめずらしいことのようである。

ある本にこういう面白いエピソードが紹介されていた。

――あるフランス人の研究者が初めて日本語で研究発表をしたとき、結論を述べて発表を終えたが、会場からは何の反応もなかった、と。その原因は、発表の終わりに、「以上です」という意味の言葉がなかったから、というのである(フランス・ドルヌ、小林康夫『日本語の森を歩いて』)。たしかに日本人には、そうした「ここまでだ」「ここで終わる」ということを、何かしらの言葉にして確認することによって次の場面に移って行く、というような傾向、心の構えのようなものがある。

Ⅲ

ならば、「さようであるならば」というのは、そこで何を確認しているのだろうか。

むろんあいさつ言葉であるから、いつも意識的にそうしているというわけではない。が、「さようであるならば」と言っているかぎり、何かしらの「さよう」の中味が考えられる。その中味の問題である。

そうあらためて考えてみると、そこには、二つのことがE<ruby>シテキ<rt></rt></ruby>できるように思う。一つは、その別れの時までに自分自身がやってきたさまざまな事柄の確認であり、もう一つは、その別れの時までに自分の努力や思いを超えて働いてきたであろう不可避・必然の事柄の確認である。

まず、前者から見ておこう。問題を見やすくするために、すこし具体的に、別れのF<ruby>サイ<rt></rt></ruby>たるものである死の場合を例にとってみよう。

はやくから「死の医学」を提唱してきた作家の柳田邦男さんは、現代は「自分で自分の死を創る時代」だと言っている。「自分の死を創る」とは、自分が生きてきたさまざまな出来事を、何らかのかたちで自分でまとめ、確認することによって、来たるべき死を受けとめるということである(『「死の医学」への日記』)。

それはまさに、人生を「さようであるならば」と確認しようとすることであろう。それまでの自分の<ruby>来<rt>こ</rt></ruby>し方を自分なりの言葉にし、いわば一つの物語のようにまとめ上げることによって、死というものを受容しようとするということである。

『平家物語』の終わり近くに、(1)壇ノ浦の合戦で敗れ、死んでいく平家の武将の一人、平知盛が、最期に、次のように言って入<ruby>じゅ<rt></rt></ruby>水自殺するG<ruby>シュウチ<rt></rt></ruby>の場面がある。

見るべき程の事は見つ、今は自害せん。

知盛は、平家の武将として自分が見てきたことのあれこれを思い返しながら、やるべきことはやった、これでよし、これでお<ruby>終<rt>しま</rt></ruby>いだと、みずからの生を総括し、完結させたのである。ここには「さらば」ろう(「(2)今はの言葉」というときの「今は」でもある)。「さらば」「さようならば」という言葉はないが、「今は」とは、実質的な「さらば」である。の総括・確認ということが考えられる。

が、ここでもそうであるが、そこでは同時に、自分一己のやってきたことだけでなく、戦い全体の趨勢とか、平家一門の運命といったような、自分を超え、自分にもどうにもならない事柄の確認もなされているはずである。そもそも死は戦死のみならず、生き物としての人間にとって不可避・必然の事柄でもある。

死という別れだけでなく、一般的に、あらゆる別れには、何ほどか、不可避・必然の働きというものがある。「さようであるならば」の「さよう」には、もう一つの、そうした事柄の確認ということが考えられる。

「サヨナラ」ほど美しい別れの言葉を知らない、と言ったアメリカの紀行作家、(3)アン・リンドバーグの「サヨナラ」理解は、おもにこちらの方の考え方である。

「サヨナラ」を文字どおりに訳すと、「そうならなければならないなら」という意味だという。……Auf Wiedersehen や Au revoir や Till we meet again のように、別れの痛みを再会の希望によって[H]マギらそうという試みを「サヨナラ」はしない。目をしばたたいて涙を健気に抑えて告げる Farewell のように、別離の苦い味わいを避けてもいない。……「サヨナラ」は言いすぎもしなければ、言い足りなくもない。それは事実をあるがままに受けいれている。人生の理解のすべてがその四音のうちにこもっている。ひそかにくすぶっているものを含めて、すべての感情がそのうちに埋み火のようにこもっているが、それ自体は何も語らない。言葉にしない Good-by であり、心をこめて手を握る暖かさなのだ――「サヨナラ」は。

（『翼よ、北に』）

世の中には出会いや別れをふくめて自分の力だけではどうにもならない不可避・必然の働きがあるが、日本人は、それをそれとして静かに引き受け、「そうならなければならないなら」という意味で「サヨナラ」と言って別れているのだと、リンドバーグは理解している。

イタリア文学者の須賀敦子は、リンドバーグのこの文章を読んで、こう述べている。

――ともすると日本から逃げ去ろうとするときに、「あなたの国には「さようなら」がある、と、思ってもみなかった勇気のようなものを与えてくれた」、と（『遠い朝の本たち』）。それだけの力をもったものとして、「さようなら」という言葉の存在が受けとめられていたということである。

Ⅳ

以上のような「さらば」「さようなら」が、しばしば、ある種の弾み・勢いをもった言葉とともに語られていることに注目しておきたい。

・大将、よしさらばとて帰り給ひぬ。
（『宇津保物語』）

・いざさらば　盛りを思ふも　ほどもあらじ　藐姑射が峯の　花にむつれし
（西行『山家集』）

――藐姑射が峯（鳥羽上皇の仙洞御所のこと）の桜花になじんできたが、その花盛りを思うのもしばしのこと、いざお暇しよう。

・思えばいと疾し　今こそわかれめ　いざさらば
（「仰げば尊し」）

「いざ」は、人を誘うときや自分が思い切った行動を起こすときに弾みをつけようと使う言葉であり、「よし」は、満足ではないが仕方がない、ままよ、と許容する言葉である。「さらば」「さようなら」は、事態が事態だけに、そこには何かしらの思い切りがあり、諦め・決断がある。それが、こうした言葉とともに語られることにおいて、次のことへと移って行ける、行こうとしているということである。

『東海道中膝栗毛』の作者、(4)十返舎一九の辞世の歌は、次のようなものである。（〃辞世〃という、あまり外国には見られない最期の思いの[I]ヒョウシュツのあり方自体も、まさに「さようであるならば」の総括行為と考えられる）。

この世をばどりゃおいとまに線香と　ともにつひには灰左様なら

いうまでもなく、「灰」は、皆ついには「灰」になるという意味と、「はい、さようなら」の「はい」とが掛けられている。ここには、[J]ケイミョウなまでの死の受容が見られるが、それが、こうした「はい」とか「どりゃ」といったかけ声とともになされていることをあらためて確認しておきたい。

Ⅴ

最後に、(5)もう一つ大事なことがある。

「さようなら」は、もともと接続詞、つなぎの言葉であった。「さようであるならば」という確認でとどめているのであり、その先どうする、どうなるということを語らないままに別れているということの意味である。

それは、この先どうなるかは問わないままに、ともあれ、過去をふまえ、現在を確認・総括することにおいて、この先へと何らかのかたちでつながって行けるのではないかという、いわば呪いのようなものとも考えることができる。

死の問題でいえば、死や死後のことはどういうものであるかはわからないが、これまでのことを「さようであるならば」と確認できたならば、死んだとしてもこの先、何とかなる、だいじょうぶだといったような思いがそこにはあるということである。甘えといえば甘えなのかもしれないが、それもまた祖先たちの持ち来たった大事な知恵の財産のように思う。

「さようなら」は、それだけの力のある言葉だということである。

（竹内整一『やまと言葉の人間学』より）

二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間　七十分）　その三

問一　本文は五つに分けられ、それぞれに見出しがついている。空欄**Ⅰ**～**Ⅴ**に入れるのに適切な見出しを次の**ア**～**オ**の中からそれぞれ選び、符号を記せ。

ア　弾み・勢いを秘める「さらば」「さようなら」
イ　「さらば」「さようなら」は接続詞
ウ　「さようなら」のその先へ
エ　日本と世界の別れ言葉
オ　「さようであるならば」とは

問二　「　**1**　」～「　**7**　」には次の**ア**～**キ**の言葉が入る。このうち「　**1**　」～「　**3**　」に入る言葉として適切なものを**ア**～**キ**の中からそれぞれ選び、符号を記せ。ただし、「　**1**　」「　**2**　」の解答は順不同である。

ア　それでは　**イ**　またね　**ウ**　じゃあ　**エ**　ごきげんよう　**オ**　では　**カ**　じゃあ、また　**キ**　ほな

問三　傍線部(1)「壇ノ浦の合戦で敗れ、死んでいく平家の武将の一人、平知盛」とあるが、筆者はこの例を通してどういうことを言おうとしているのか。六十字以内で説明せよ。

問四　傍線部(2)「今はの言葉」とはどういう意味か。次の**ア**～**オ**の中から適切なものを選び、符号を記せ。

ア　今となっては昔の言葉　**イ**　今更言うまでもない言葉　**ウ**　今流行の言葉
エ　死者への祈りの言葉　**オ**　死に際の言葉

問五　傍線部(3)「アン・リンドバーグの『サヨナラ』理解」とはどういうものか。九十字以内で説明せよ。

問六　傍線部(4)「十返舎一九（じっぺんしゃいっく）の辞世の歌」の「灰（はい）」には、「灰」とは「はい、さようなら」の「はい」とが掛けられているが、この歌にはこれ以外にも二つの意味が掛けられている箇所がある。それについて説明した次の文の空欄を適切に埋めよ。ただし、□は一文字を示している。

「□□」の「□」と、「立ち去ろう」という意味である「□□□□□」の「□□」とが掛けられている。

問七　傍線部(5)「もう一つ大事なこと」とあるが、それを八十字以内でまとめよ。

問八　傍線部**A**～**J**のカタカナを漢字に改めよ。

〈四十点〉

二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間 七十分）　その四

《二》 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（字数制限のある問題については、句読点も一字に数える。）

シベリアに親を亡くしたポーランド人の子供たちが三百人もいると、日本に助けをもとめるメッセージが、シベリアのポーランド人から届いた。赤十字社の一員である鍋島榮子は、赤十字本社に赴いた。

「政府はシベリア出兵で、何億円も支出しているんですよ。そんな金が、どこにあるんですか」
「赤十字が寄付を集めます」
「赤の他人の、まして注1異人の子供に、寄付など出す人がいますかね。だいいち、この不景気の最中に」
この春に株価が大暴落しており、多額の投資をしている鍋島家も、大きな損失を出している。それでも榮子は強気で言った。
「何億円もの戦費や、注2病院船の建造費と比べたら、子供たちにかかる費用など、たいした金額ではありません。だいいち三百人の命を、お金で買えるとしたら、買わない方がおかしいでしょう。戦争で人を殺すのには何億も使っておいて、助けるのには出さないとでも言うのですか」
注3石黒が口を挟んだ。
「鍋島さん、①そんな感情論で話をされても困ります。子供たちが来てしまってから金がないでは、どうにもならんでしょう」
「わかりました。ならば、こうしましょう。とりあえずは今あるお金で迎え入れます。子供たちが来たら、新聞や雑誌に取材してもらいます。これは美談です。かならず記事になるし、かならず寄付は集まります」
「鉄道の運賃や、アメリカに送り出す船代だって、かかるでしょう」
「それは鉄道省や船会社に掛け合って、値引きしてもらいます。その話も新聞に書いてもらいます。世の中が不景気だからこそ、こんな話題は歓迎されます」
理事たちは顔を見合わせた。
ひとりが片手を挙げて発言した。
「でも三百人で、すむんですかね。いったん受け入れたら、後から後から、限りなく押しつけられるんじゃないですか」
「受け入れれば、いいではありませんか。いくら何でも、一万人も来るわけではありません」
「だが、そんな②食うや食わずの子供じゃ、健康であるはずがない。伝染病を持ち込まれたら、どうするんですか」
「病気を治すために、赤十字病院があるのです。私たちが何より得意なことです」
「だいいち、どこで受け入れるんですか。それにアメリカの受け入れは確かなんですかね」
「東京での受け入れは、となりの注4福田会の施設と、もう話がついています」
ただし福田会からは、五十人が限度と言われている。榮子が見に行ってみると、もっと収容できそうだった。子供の世話は、看護婦が担うと約束しても、言葉が通じなくては、それ以上は無理だと釘を刺された。
しかし、その点を、あえて言う必要はない。深く追及されないうちにと、榮子は手早く国際電報を開いて見せた。
「アメリカの赤十字社からも、受け入れ確定の返電が届いています」
「でもねえ」
なおも文句を言おうとする幹事に、榮子は手のひらを向けた。
「できない理由を言い立てても、きりがありません。先に受け入れると決めてください。それから方法を考えませんか」
その幹事は、むっとして言い返す。
「そんな無責任なことができますか。できなかったら、どうするんです？　人の命がかかっているのですよ」
「人の命がかかっているからこそ、何が何でもやり通すんです。それが責任のとり方です」
「でも、どうやって子供を、日本まで連れてくるつもりですか」
「今、ウラジオストックに、病院船が行っています。あれに乗せます」
すると、それまで黙っていた石黒が反対した。
「病院船は負傷兵士を助けるものだ。子供を乗せる余裕などない」
軍は病院船を、自分たちの既得権のように考えていた。榮子は押しきれないと判断して、別の案を出した。
「それなら海軍に輸送船を出してもらいましょう」
「いや、そんな異人の子供のために、わざわざ海軍が協力するはずがない」
別の幹事も口を挟む。
「だいいち、そんな子供のことは、③当該国が責任を持つべきでしょう。ポーランドやロシアの尻ぬぐいを、なぜ私らがするのですか」
あまりに頑固で、気持ちが萎えそうになる。この連中にとって、ポーランド人の子供など、どうでもいい他人事なのだ。とにかく、
「［　④　］、危うきに近寄らず」か「触らぬ神に祟りなし」という態度だった。
それでも榮子は、気力をb振り絞って言った。
「想像してください。あなたの子供が、あなたの幼い孫たちが、極寒の地で、飢えてふるえている。助けたいとは思いませんか」
また感情論と言われc そうで、すぐに論点を変えた。
「子供たちはロシア革命の犠牲者です。もともとシベリア出兵は、ロシア革命に、もの申すために始めたことでしょう。この子供た

二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間　七十分）　その五

ちを[e]助ければ、今、批判を浴びているシベリア出兵も[f]正当化されます。あたかも子供たちを救うために、出兵しているかのような印象さえ、世の中に与えるでしょう。それにアメリカ、イギリス、フランスからも称賛さ[g]れるのは、疑いありません。日本の国際的な評価を高める機会です」

一気に言って、なおつけ加えた。

「何度も申しますが、これは美談です。ほんの少しの面倒をかぶるだけで、国内外の共感を、かならず得[h]られます。こんな好機を逃す手はないでしょう」

そこまで言い切ると、幹事たちは反論できなくなって黙り込んだ。

⑤それでも、ひとりが口を開いた。

「だがね、鍋島さん」

そのとき石黒が太い声で先んじた。

「私は賛成する。⑥シベリア出兵が正当化されるなら、何よりだ」

榮子は胸が高なった。⑦それでも、また全員が黙り込んでしまった。

すると、さっき何か言いかけた幹事が、周囲を見まわしてから、きまり悪そうに言った。

「石黒社長が、そう仰るなら、それでいいんじゃないですか」

自分には責任はないと言いたげだった。

「ねえ、皆さん、そうじゃありませんかね」

すると、その言葉に賛同の声が続いた。もう長時間の会議で、だれもが飽き飽きしていた。

石黒がまとめにかかった。

「では、ポーランド人の子供の件は、引き受けることに決定します。細々したことは、鍋島さんに頼みましょう」

そして榮子に笑顔を向けた。

「それで、よろしいかな」

思わず⑧声がうわずった。

「もちろん、やらせていただきます」

会議室から出ていく幹事たちの背中から、陰口が聞こえた。

「怖いおばさんだよなァ」

「いや、もう怖いばあさんですよ」

「あれでも昔は[注5]鹿鳴館の花って、言われたらしいですよ」

「今じゃ、鹿鳴館の枯れ花だな」

男たちの肩が、忍び笑いで揺れる。

榮子も思わず笑い出した。容姿の衰えは自覚している。でも鹿鳴館の花などと持ち上げられるより、無理解な男たちに怖がられる方が、⑨はるかに痛快だった。

（植松三十里『鹿鳴館の花は散らず』より）

〈注〉

1　異人――外国人のことをいう、当時の言葉。

2　病院船――日本赤十字社初代社長が多額の資金を集め、赤十字は二隻の病院船をもつことができた。

3　石黒――日本赤十字社の四代目社長。

4　福田会――寺院が運営する育児院。

5　鹿鳴館――明治十六年、東京日比谷に建設された外国要人接待の社交場。

問一　傍線部①「そんな感情論で話をされても困ります」とあるが、榮子の発言のどのような点を指して、「感情論で話をされても困ると言っているのか。六十字以内で説明せよ。

問二　傍線部②「食うや食わず」の意味として適切なものを次の**ア**～**オ**の中から選び、符号を記せ。

ア　初対面の人に食事を勧められることが苦手なこと。
イ　食物を口にするとすぐに食べるのを拒否すること。
ウ　食事をとったりとらなかったりと気まぐれなこと。
エ　食糧に限りがあって節約しつつ生活していること。
オ　ほとんど満足に食べることもできないということ。

問三　傍線部③「当該国」の意味として適切なものを次の**ア**～**オ**の中から選び、符号を記せ。

ア　条件が合致したならばどこでも構わない国。
イ　今話題になっている事柄に直接関係する国。
ウ　法的に権利を行使することのできそうな国。
エ　願いを叶えるのに相応しい実行力を持つ国。
オ　交渉の結果により同盟にまで至っている国。

二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間　七十分）　その六

問四　空欄 ④ に入る語として適切なものを次の**ア**～**オ**の中から選び、符号を記せ。

ア　宰相　**イ**　君子　**ウ**　歳月　**エ**　神仏　**オ**　魂魄（ばく）

問五　傍線部⑤「それでも」および傍線部⑦「それでも」における状況の説明として、最も適切なものを次の**ア**～**カ**の中からそれぞれ選び、符号を記せ。

ア　子供の救助の実現に向けて追い風が吹いてきたとはいうものの、賛成の声はなかなか続かない。
イ　多数の幹事は国際的な評価の高まる日本を夢見ているのに反し、一部の幹事は夢物語に冷淡である。
ウ　子供の救助などということは感情論をいくら重ねても到底無理だとしびれを切らしている。
エ　日本の評価が高まると言われれば反論する言葉もないが、まだ懸念が残り、意見を自分なりに表明したい。
オ　今の日本の状況でどうして子供の救助に賛同する者が現れるのか、幹事一同まったく解（げ）せない。
カ　日本の政治的評価を高める絶好の機会と聞いて心が動くけれども、賛成の声をあげようか葛藤している。

問六　傍線部⑥「シベリア出兵が正当化される」とあるが、ここで「シベリア出兵が正当化される」理屈を百二十字以内でまとめよ。

問七　傍線部⑧「声がうわずった」とあるが、どういうことか。最も適切なものを次の**ア**～**オ**の中から選び、符号を記せ。

ア　興奮して気持ちが高ぶった
イ　落胆して悲しみが湧き出した
ウ　他人の力で無理に押さえつけられた
エ　他人の声音が知らず知らずに伝染した
オ　心境の変化に口が追いつかなかった

問八　傍線部⑨「はるかに痛快だった」とあるが、これはどのような心情であるか。分かりやすく説明せよ。

問九　波線部**a**「だっ」、**c**「そうで」、**d**「う」、**g**「れる」、**h**「られ」の意味として、適切なものを次の**ア**～**シ**の中からそれぞれ選び、符号を記せ。なお、同じ符号を二度以上使ってもよい。

ア　例示　**イ**　様態　**ウ**　断定　**エ**　受身　**オ**　尊敬　**カ**　過去
キ　推量　**ク**　意志　**ケ**　伝聞　**コ**　推定　**サ**　可能　**シ**　自発

問十　波線部**b**「振り絞っ」、**e**「助けれ」、**f**「正当化さ」について、活用の行と種類、活用形をそれぞれ記せ。

問十一　二重傍線部「海軍に輸送船を出してもらいましょう」を、例にならって単語に分けよ。

例　私／は／中学生／だ。

〈四十点〉

二〇二五年度　ラ・サール高等学校入学試験問題　国語（時間　七十分）　その七

《三》 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

注1鬼丸と申すは、北条時政天下を取つて注2四海を静めし後、長一尺ばかりなる小鬼、夜々時政の跡枕に来て、夏ともなく幻ともなくて、注3犯さんとすること度々なり。注4修験の人加持すれども止まず。注5陰陽寮対すれども立ち去らず。A あまつさへこの故に時政病を受けて、身心苦しむこと B ひまなし。時政がある夜の夢に、この太刀一人の老翁に変じて、「我常に汝を擁護する故に、かの妖怪のものを退けんとすれば、汚れたる人の手を以て刃をさぐりたる故によつて、錆身より出でて、抜かんとすれども叶はず。早くかの妖怪を払はんと思はば、清浄ならんずる人をして、我が身の錆を拭はすべし」と、委細に教へて、①老翁はまた元の太刀になりぬと見えたりける。時政 C つとに起きて、不思議の思ひをなし、老翁の夢に示しつるごとく、②ある侍に行水をさせ手水を仕はせて、この太刀の錆を拭はせて、いまだ鞘にはささで臥したる傍らの柱にぞ立てたりける。冬のことなりければ、暖気を注6内に籠めんとて火鉢を近く取り寄せたるに、台を見れば、銀を以て長一尺ばかりなる小鬼を鋳て、眼には水晶を入れ、歯には金をぞ沈めたりける。時政これを見て、この間夜々夢に来て見えつる鬼形の者は、さもこれに似たるものかなと、面影あるに様にて③守り居たるところに、抜きて立てたる太刀俄に倒れかかりて、この火鉢の足なる鬼の首を懸けず切つて落としける。誠にこの鬼や犯しけん、時政急に D 心地治りて、その後よりは鬼形のもの夢にもかつて見えざりけり。さて④こそこの太刀を鬼丸と名づけて、注7高時の代に至るまで、平氏嫡家に伝へて、身を放たず⑤守りとなりにけれ。

（『太平記』巻三十二より）

〈注〉
1 鬼丸――北条家に伝わる刀。後に天下五剣と称される名刀の一振りとなる。
2 四海を静めし後――天下を治めた後。
3 犯さんとする――取り殺そうとする。
4 修験――山岳における修行によって超自然的な力を得、それを駆使しようとする仏教信仰の一種。
5 陰陽寮――陰陽五行説に基づいて、天文、暦数をつかさどり、吉凶を占うことを目的とした学問を陰陽道といい、陰陽道を司る役所を陰陽寮といった。
6 内――部屋の中。
7 高時――北条高時。鎌倉幕府最後の執権。北条時行の父。なお、北条氏は平氏を祖とするという考えに基づき、この文章では北条氏を「平氏嫡家」と表現している。

問一　傍線部A～Dの訳として正しいものを次のア～オの中からそれぞれ選び、符号を記せ。

A「あまつさへ」
ア　それどころか
イ　依頼して
ウ　甘えて
エ　油断して
オ　あまりにも

B「ひまなし」
ア　隙間だらけ
イ　やる気無し
ウ　時間がない
エ　絶え間ない
オ　お暇したい

C「つとに」
ア　努めて
イ　徐に
ウ　朝早く
エ　伝言で
オ　土産に

D「心地治りて」
ア　居心地が悪そうに
イ　体調が良くなって
ウ　気持ちが高揚して
エ　考えがまとまって
オ　治安が良くなって

問二　傍線部①「老翁はまた元の太刀になりぬ」とあるが、これはどういうことか。説明せよ。

問三　傍線部②「ある侍に行水をさせ手水を仕はせて、この太刀の錆を拭はせて」とあるが、時政は何のためにそうさせたのか。説明せよ。

問四　傍線部④「こそ」の結びの語を抜き出せ。

問五　次の文は、傍線部③「守り」と傍線部⑤「守り」について解説したものである。空欄部分に当てはまる言葉を考えて埋めよ。

傍線部③の「守り」は動詞の連用形で、「［　　］」の意味であるのに対し、傍線部⑤の「守り」は名詞で、「守護（の太刀）」の意味である。

問六　次の**ア**～**ク**のうち、本文の内容として正しいものには○を、間違っているものには×を付けよ。

ア　鬼丸は元々は北条時政を苦しめていた鬼だったが、最後は北条家の刀へと変化した。

イ　北条時政のために修験（しゅげん）者や陰陽（おんみょう）寮の人々は鬼の対処をしようとしたが、効果はなかった。

ウ　刀は北条時政を鬼から守ろうとしていたが、理由があって力を発揮できずにいた。

エ　鬼丸が錆（さ）びていたのは、鬼丸自身の過去の行為の報いで、まさに身から出た錆であった。

オ　時政は、鬼丸の手入れをさせた後、太刀を鞘（さや）に収めてから柱に立てかけることにした。

カ　夢から覚めた時政は、小鬼の見た目に似せた装飾を、銀・水晶・金を使って作らせた。

キ　鬼は銀・水晶・金に閉じ込められていたため、太刀でそれらを切ったことで解放された。

ク　火鉢の足の装飾としてかたどられていた鬼が、時政を苦しめていた小鬼の正体だった。

〈二十点〉